

JICA 海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

10

2026
OCTOBER

特集

第4回社会還元表彰受賞者に聞きました!

成果を引き寄せた“私のモットー”

派遣国の横顔 [日系社会]

時代と共に変化と広がりを見せる日系社会の中で
活動が続けてきたJICAボランティアの歩み



セブ島で有機農業の普及に取り組んでいて、農家グループが共同運営する畑で意見交換をしました。地形や気候に合わせた知恵や手法など、現地から多くのことを学んでいます (フィリピン)



広島出身OVが日系移住地からの千羽鶴を奉納 パラグアイと日本で平和の環流を

ただのあんな
只野杏奈さん（パラグアイ／青少年活動／2022年度4次隊・広島県出身）

8月5日（水）、JICA中国主催の式典、「^へ環ぐる平和の想い〜つなぐ未来〜」で、パラグアイの日系移住地の方々が折った千羽鶴を、広島市の平和記念公園に奉納しました。これは私が隊員時代に任地のピラボ市を含む4つの町で「平和展」を実施した際に折ってもらったもので、その数は実に合計5,000羽。うち4,000羽を奉納する運びとなり、当日は日系2世でもあるマリオ・マサユキ・トヨシ駐日パラグアイ共和国特命全権大使のご臨席の下、直々に千羽鶴を手にとって奉納していただきました。

ピラボ市は戦後に日系移民が開拓した町で、近隣には広島県人が中心となって造ったラパス市（スペイン語で平和の意）もあります。日本との関わりも深いこの地で、必ずや平和展を行いたいと考えていました。ただ、日本語学校や幼稚園での活動に試行錯誤する中で時間はどんどん過ぎ、同僚らと話途中で平和展開催にこぎ着けたのは、着任から1年余りたった2024年8月。初めは学校の授業で平和教育をするイメージだったのですが、町の方々がもっと地域を巻き込んだイベントにしようと言ってきて、3日間にわたるパネル展示や原爆に関する講演、ビデオ放映などを含む一大イベントになりました。折り鶴コーナーのほか、寄せ書きやディスカッションなど、来場者が主体的に参加できる工夫もしました。

ピラボでは、まだ存命の1世の世代でも「幼少期に日本を離れたので“ヒロシマ”のことをよく知らない」というケースが少なくありません。平和展で改めて衝撃を受けて涙ぐむ人や、学びになったとのコメントをくださる人もいて、開催してよかったと思います。

任地での平和展が成功裏に終わって「やり遂げた!」と感じていたところ、配属先の校長先生からの薦めでラパス市でも開催することになり、同じく近隣にあるエンカル

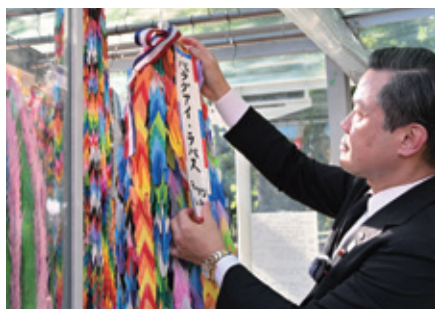


平和記念公園の「原爆の子の像」の前での黙とう後、奉納を実施。中央2人がトヨシ大使夫妻、右端が只野杏奈さん、左端はJICA中国の菅原奈奈子所長

ナシオン市や首都アスンシオン市の日本人会からも声掛けを頂きました。最後の第4回は帰国1週間前にギリギリで開催。配属先の理解とご縁で念願の活動に全力で取り組めて、本当にありがたかったです。

また、一連の開催の中、広島をルーツとする日系人の方々から、広島での被爆後に海外へ移住し、移住先で白血病などにより亡くなった方もいると伺いました。「在外被爆者」として苦勞した方々のことを私は知らなかったので、新たな学びを得る機会にもなりました。

今回、パラグアイからの千羽鶴をJICA中国などのサポートで奉納できて感無量です。平和展の活動が1つの区切りを迎えたことでうれしい半面、寂しさも感じますが、「皆が平和への願いを込めて一羽一羽折ってくれた千羽鶴を無事届けたよ!」と現地に伝えたいです。広島から平和への思いがパラグアイに届き、パラグアイの人々の祈りがこもった千羽鶴の形で広島へと環流する…そんな活動に関わってくれた方々に感謝するとともに、このつながりが途切れず未来へと受け継がれていくことを願っています。



上：千羽鶴を納めるトヨシ大使。「私も90年前に海を渡った日本人の子孫として、この場で皆様と平和への祈りをささげられることを名誉に思います。この折り鶴は先人たちの感謝であり、平和を願う子どもたちの折りであり、未来への希望そのものです」と語った

左：平和展で折り鶴を折る子どもたち。非日系パラグアイ人の子も参加していて、日系の子らが折り方を教えた

Text & Photo＝飯淵一樹（本誌） 写真提供＝只野杏奈さん



COLUMN — 表紙によせて

セブ州の州都・セブ市に赴任し、市役所で有機農業の普及に取り組んでいます。写真は同僚と共に農家グループが協力して運営している畑を訪ね、ナスの栽培について意見交換している場面です。傾斜地が多く、限られた農地のため、等高線に沿って畝を立てるなどの工夫や知恵を学ばせてもらっています。雨期と乾期がある気候に合わせた手法も見られ、「農業って面白い」と改めて思っています。松井美奈さん（フィリピン／野菜栽培／2024年度3次隊・大阪府出身）

国別索引	掲載ページ
ウガンダ	6、7
スリランカ	21
ドミニカ共和国	14
パナマ	18
パラグアイ	2、13
フィリピン	1
ブラジル	10、11、15、16
ボリビア	24
マラウイ	8、9
マレーシア	17
ヨルダン	22
ルーマニア	23

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	6、8、14、15
村落開発普及員	17
野菜栽培	1
林業・森林保全	17
食品加工	21
食品加工・流通	21
青少年活動	2
陸上競技	18
日本語教育	16
体育	22
小学校教育	9、24
保育士	23
児童教育（教諭）	13
動物学	7
日系日本語学校教師	10、11
システムエンジニア	23

出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	17
千葉県	9、15
東京都	23
神奈川県	7
長野県	8、21
福井県	6
岐阜県	11
愛知県	10、22
三重県	18
大阪府	1
広島県	2
山口県	14
福岡県	13
沖縄県	24

CONTENTS

- 2 JICA Volunteers' Reports
- 3 CONTENTS／索引
- 4 JICA 海外協力隊派遣現況

5 [特集] 第4回社会還元表彰受賞者に聞きました! 成果を引き寄せた “私のモットー”

- 12 知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから
派遣国の横顔 [日系社会]

- 17 お悩み相談
アドバイスを聞きました!

- 18 派遣から始まる未来
先輩隊員たちの社会還元

- 20 INFORMATION
— JICA 青年海外協力隊事務局からのお知らせ

- 21 あの日、地球の、あの場所で。

- 22 OB・OG ショップファイル

- 23 隊員めし — 任地の食生活に彩りを!

- 24 公開! 私の派遣国生活 [ボリビア]

『クロスロード』(通常号)は、JICA 海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

【凡例】JICA 海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

氏名	派遣国	職種	隊次
国際協力さん	(ケニア)	環境教育	2026年度1次隊

JICA 海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。





アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	39	1
エチオピア	20	
ガーナ	39	
ガボン	12	1
カメルーン	22	
ケニア	38	
ザンビア	36	
ジブチ	10	
ジンバブエ	19	
セネガル	29	3
タンザニア	26	
ナミビア	13	
ベナン	9	
ボツワナ	21	2
マダガスカル	39	
マラウイ	33	
南アフリカ共和国	7	
モザンビーク	8	
ルワンダ	28	1

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	10	
インドネシア	19	
ウズベキスタン	21	
カンボジア	34	
キルギス	28	1
ジョージア	13	
スリランカ	25	
タイ	39	
タジキスタン	7	4
ネパール	18	1
バングラデシュ	4	
東ティモール	37	
フィリピン	22	
ブータン	24	1
ベトナム	40	
マレーシア	20	1
モルディブ	7	
モンゴル	20	1
ラオス	41	1

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	7	
サモア	10	
ソロモン	23	
トンガ	15	2
バヌアツ	19	
バブアニューギニア	20	
パラオ	24	2
フィジー	9	
マーシャル	14	1
ミクロネシア	15	

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	5	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	23	
チュニジア	15	
モロッコ	22	
ヨルダン	9	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン	4	6	1	
ウルグアイ		2		
エクアドル	23			
エルサルバドル	20			
キューバ		2		
グアテマラ	22			
コスタリカ	17			
コロンビア	25	2		
ジャマイカ	3			
セントルシア	8	1		
チリ	12	2		
ドミニカ共和国	19		5	
ニカラグア	19			
パナマ	15			
パラグアイ	22	4	6	1
ブラジル			36	
ベリーズ	14			
ペルー	34			
ボリビア	41	1		
ホンジュラス	27			
メキシコ	12	3		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,440 (529/911)	44 (31/13)	53 (17/36)	2 (2/0)	1,539 (579/960)
累計 (男性/女性)	49,773 (25,917/23,856)	6,763 (5,458/1,305)	1,712 (664/1,048)	557 (258/299)	58,805 (32,297/26,508)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊 シニア = シニア海外協力隊 日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊 (単位:人)

表彰式で取り組みを発表した受賞者の方々とJICAの田中明彦理事長（前列中央）。ムスクワ野原さんはマラウイからオンラインで発表し、当日はPenjani Malawi日本支部の豊田 萌さん（マラウイ/コミュニティ開発/2016年度3次隊、前列左）が出席した



表彰式当日の映像はコチラ



特集

第4回社会還元表彰受賞者に聞きました！

成果を引き寄せた “私のモットー”

4回目となる「JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰」の表彰式が6月に行われ、6人の受賞者による活動発表に加え、大賞が選出された。これは帰国後20年以内のOVを対象に、国内外、公私を問わず社会課題の解決に取り組んでいる人を表彰するもので、途上国での協力隊活動で磨かれた経験や知見を生かし、社会貢献につながる取り組みを推し進める目的で行われている。特集で紹介するに当たり、受賞者たちが受賞対象となった活動を軌道に乗せ、一定の成果に至るまでに培われた“モットー”や“行動指針”を伺ったので、協力隊活動のヒントにしてほしい。

Text＝池田純子 写真提供＝ご協力いただいた各位

大賞・開発協力実践賞

つばい あや
坪井 彩さん

ウガンダ／コミュニティ開発／2017年度3次隊・福井県出身

〈略歴〉

2013年 京都大学大学院修了後、パナソニック株式会社IT部門に入社
2017年 途上国向け人材を育てる社内のトレーニングプログラムに応募
2018～19年 民間連携で協力隊に参加。コミュニティ開発隊員としてウガンダで1年間活動
2019年 帰国後、復職し南アフリカ共和国とドバイに駐在
2020年 株式会社Sunda Technology Globalを設立
2021年 SUNDAの取り組みが「第6回日本アントレプレナー大賞」を受賞。会社を退職しウガンダへ渡航



画期的な自動井戸水料金回収システムのアイデアは 協力隊員ならではの“現場主義”から生まれた

井戸の維持・管理を円滑に行うための画期的な水料金回収システムを開発し、導入したことが評価され、表彰式で大賞に輝いた坪井 彩さん。そのモットーは、“現場主義”だ。「協力隊時代から現場主義を貫いてきました。仮説を考え続けるだけでは、課題解決への答えはなかなか出てこない。現場に入り、自分も当事者として観察し、問題は何かを理解する。そうして初めて、どんなソリューションを提供すればよいかを考えることができるようになると思います」

坪井さんがウガンダでの隊員活動で提供したソリューションは、従量課金型の自動井戸水料金回収システム「SUNDA」。「ウガンダでは井戸や水栓を設置しても、ひとたび故障すると、修理のための費用が足りないため、使えないまま放置されるケースが多々あります。そこで、住民から水料金を徴収し、そのお金をメンテナンスや修理に充てる仕組みを作りたい。そのために開発したのがSUNDAです」

SUNDAの仕組みは、日本の交通系ICカードと同じようなプリペイド式だ。井戸を利用する住民は、配布されたSUNDAのICタグに料金をチャージしておく。井戸に設置されたSUNDAユニットにICタグを挿入すれば水をくむことができ、水量に応じた金額が差し引かれる。このアイデアは、どこから生まれたのだろうか。

「まさに現場です。そもそも、なぜ井戸修理費は回収できていないのか。住民が共有している井戸だから、皆で少しずつお金を出し合って修理費用を賄えばいい。外から考えれば、そう思いますよね。そこである村へ行き、壊れた井戸を目の前にして、費用の回収に応じない人たちと個別に話しました。すると、『払ったお金が本当に修理に使われるのか分からない』という不信感があったり、水を少ししか使わない人もたくさん使う人も同じ額を払うという不公平感があったり、という事情が見えてきました。そういった声を聞いて初めて、SUNDAというソリューションが生まれたのです」

帰国後に株式会社Sunda Technology Globalを設立して、



SUNDAユニットを設置したハンドポンプ井戸の前に、Sunda Technology Globalのウガンダ人エンジニア2人と共に笑顔を見せる坪井さん

2021年には再びウガンダに戻り、首都カンパラを拠点に活動している坪井さん。現在、ウガンダでSUNDAを導入している井戸は約300カ所で、公共水栓への導入も増えている。運用成果を数字にし、政府や他の国際機関に共有しながら広げている最中だが、現場主義はますます強まっているという。「事業を進める上ではさまざまな判断や問題解決が必要になりますが、現場をきちんと見て、答えを考える。その方針はずっと大切にしています」

振り返ってみると協力隊活動は、現場を知る絶好の機会だったと坪井さん。「私自身、協力隊参加以前に社内ワークショップでアフリカの社会課題を解決する物作りに取り組みましたが、なかなか説得力のあるアイデアに達しませんでした。でも協力隊に参加して現場を知ったことで、課題を理解し、解決策を考え、それを社会に実装するところまで進めることができました。隊員の皆さんには、現場に行き、課題と向き合える時間があります。ぜひ2年間で有効活用してほしいです」

地域活性化賞

たかはし ふみりこ
高橋文彦さん

短期／ウガンダ／動物学／2012年度9次隊・神奈川県出身

〈略歴〉

1997年 専門学校卒業後、横浜市立よこはま動物園ズーラシアの開園メンバーとなる
2012年 社会福祉法人神奈川民間保育園協会児童野外活動センターこどもの杜で動物飼育および教育普及イベントを担当
2013～14年 JICA草の根技術協力事業の一環で短期隊員として1年間ウガンダ野生生物保全教育センターで活動
2014年 JICA横浜でウガンダ野生生物保全事業などを担当
2019年 一般社団法人地球温暖化防止全国ネット脱炭素チャレンジカップ事務局で気候変動などの啓発事業を担当
2023年 株式会社ウェバレッジ設立



協力隊で身に付けた“動物ファースト”は 人間にも共通する相手の立場を尊重する精神

地域活性化賞を受賞した高橋文彦さんは、三重県のごかつら池どうぶつパークと京都府の福知山市動物園の管理運営に携わっている。どちらの園も高橋さんのモットーである“動物ファースト”の精神を運営に生かし、動物の保全を優先し、見学者が生物多様性や自然環境について学ぶことができる動物園を目指している。

「園で暮らす動物たちにとって適切な環境を整え、その動物らしい生き方ができることを優先させています。人間の都合だけで考えず、アニマルウェルフェア（動物の福祉）を守りながら、動物園を持続していきたいと考えています」

横浜市のズーラシアで勤務していた高橋さんが、短期隊員としてウガンダへ渡ったのが2013年。その活動を通じて動物ファーストの考えが芽生えた。

配属先では、先進国で高く売れるヨウム、食肉目的で親が殺されたチンパンジーなどの野生動物を保護し、再び野生に戻すことを目的とした活動を行っていた。

「現実を見た時に衝撃を受けました。希少な野生動物が毎日のように保護されてくるのですが、元々は野生で生きてきた動物に対するため、ケアはあまり行き届いていない。また、野生に戻すにはリハビリが不可欠ですが、その技術が不足していました。さらに飼育スペースにも限りがある。そんな事情から、ほとんどの保護動物が死んでしまう状況がありました。私が担当した子ゾウも痩せ細り、いつ死ぬか分からない状態。そんな状況の中、命を守るために何ができるかが問われていました。一方、私自身は語学力不足から現地スタッフとのコミュニケーションはままならず、日本での経験がそのまま通用する環境でもない。『教えてあげよう』という気持ちは、すぐに打ち砕かれました」

それでも、「できることをやろう」と覚悟を決め懸命に世話をするうち、ゾウの健康は回復し、高橋さんに懐くようになった。その様子を見た現地のスタッフたちが驚いて「どうやって飼育したのか?」と質問をしてくるようになり、徐々に信頼関係ができていった。

「その時に学んだのは、相手の立場に立つことの大切さです。話すことができない動物はもちろん、人間でも同じだと思います。私の場合は“動物ファースト”ですが、協力隊員であれば“パートナーファースト”ということになるでしょう」

帰国後、株式会社ウェバレッジを設立。存続危機にあった動物園を改修し、ごかつら池どうぶつパークとしてリニューアルオープンさせた。

「以前は、過剰な餌やり体験などによって飼育環境が悪化し、閉園の危機にありました。そこで、種ごとに適切な環境を整えるところから再生を始めました」

25年には公益社団法人日本動物園水族館協会に加盟したことで、希少種の受け入れや保全体制の強化が可能になった。また、JICAとの連携派遣で自社スタッフをウガンダに派遣する事業も行っている。

「ウガンダに赴任した当初は苦しくて、『早く帰りたい』と思ったこともありました。今思うと、あの経験こそが私の財産です。動物も人間も一人では生きていけません。これからも動物ファーストを軸に世界をつないでいきたいです」



ウガンダの配属先で高橋さんの介護で健康を取り戻した子ゾウと現地のスタッフたち。今年、ウガンダを再訪した高橋さんは立派に育ったゾウと十数年ぶりの再会を果たした

アントレプレナーシップ賞

ムスクワ野原^の（旧姓 徳竹）さん

マラウイ／コミュニティ開発／2016年度3次隊・長野県出身

〈略歴〉

2012年 大学卒業後、ハケ岳の山小屋に勤務

2013年 高校時代の友人の父が勤める日本企業のマラウイ現地宿舎を訪れる。マラウイを南北縦断し現地の人や各地の協力隊員を訪問

2017～19年 コミュニティ開発隊員としてマラウイで活動。18年に同期隊員と団体・ショップの立ち上げに関わる

2019年 帰国後、団体活動の改善・向上のためマラウイを再訪。日本に帰国後、再びマラウイに戻り、PENJANI Malawiをリスタートさせる

2023年 マラウイ人男性と結婚し日本で暮らす。日本からできる活動を続ける

2025年 マラウイに移住し、子育てをしながら運営に携わる



順風満帆な時ばかりではないショップ運営で身に付いた “やれる時にやる”をはじめとした3つのモットー

アントレプレナーシップ賞を受賞したムスクワ野原さんは、マラウイ北部のムジンバ県ムズズを拠点に、地域の制作者やスタッフと共に、布製品をメインとした土産物を制作・販売するショップ「PENJANI Malawi」を運営している。

活動は常に順調だったわけではない。農家の有志が土産物の販売拠点とできるよう、同期隊員と共に団体を立ち上げ、開業を支援したショップ「TIPULIKANE Malawi」は、ムスクワさんの帰国後にトラブルがあり、団体を解散。しかしムスクワさんはその後、PENJANI Malawiとして団体を再開して約6年間にわたり運営を続けてきた。近年はマラウイの急激な物価上昇という新たな課題にも直面している。困難を克服しながら事業を続ける中で培ったモットーが3つあり、その1つが、“やれる時にやる”というもの。

「マラウイでは停電や断水が珍しくありません。今は電気が来ても、いつ途切れるか分からない。材料の調達でも、“次の時”や“後で”はありません。いい布は買える時に買わないと、次に同じ柄が入荷するとは限らない。後回しにすると、できなくなることが多いのです。日本では当たり前にある電力や商品のストックがない中、やれる時にやるというのは私の行動のペースになっています」

ショップのスタートは、ムスクワさんがコミュニティ開発隊員として農家の収入や生活の向上を支援していた時のこと。「農産物の加工品は保存が利かず、販売場所も限られるけれど、布製品なら腐らず農閑期に作って保管しておける。一度身に付けた技術はなくならないし、外国人がよく来る隣町に持ってけば良い値段で売れることもできる。何よりもマラウイの色鮮やかな“チテンジェ”は、私にとって見るだけで元気になるような布で、それを使いたいという気持ちが強かったです」

PENJANI Malawiには、これまで約50世帯が参加し、約30種類の商品を展開している。地域にある素材や技術に加え、日本人の視点を加えた商品を作ってみるなど、新しい価値を生み出し、それを現地の人たちの収入につなげている。制作者の

中には、収入が増えたことで高校生と大学生の娘の学費に充てられるようになったシングルマザーもいるという。

ムスクワさんのモットーの2つ目は“何でも楽しむ”だ。

「これは隊員時代に心掛けていた言葉です。協力隊の任期は2年間。大変なことや、うまくいかないこともあります。『これは、今ここでしかできないことだ』と考え、苦労も含めて楽しもう、そう思って活動してきました」

そして3つ目は“何とかなる”。

「マラウイでは、ないものや壊れたものがあるもので代用したりします。『大丈夫、何とかなるよ』と言って、不満に思わず、人の失敗も決してとがめない。そんなマラウイの人たちの姿から学ぶことが、今もたくさんあります」

今回、PENJANI Malawiの活動が評価され、受賞の喜びをかみ締めているというムスクワさん。

「共に活動してきたマラウイの仲間たちと、受賞を喜び合いたいです。今後は、これまで個々に作業してきた制作者の人たちが、互いにつながれる場もつくっていきたいと思っています」



隊員時代に携わったショップTIPULIKANEで制作者と共に写るムスクワさん。「外国人観光客も来る任地の隣りに建設中の建物があり、マラウイ人スタッフと相談して、やれる時にやる、なんとかなる、と思い切ってオープンを進めました」(ムスクワさん)

審査員特別賞

田仲永和^{たなかひさかず}さん

マラウイ／小学校教育／2017年度1次隊・千葉県出身

〈略歴〉

2005年 大学卒業後、外務省在外公館派遣員として在中国日本国大使館に勤務

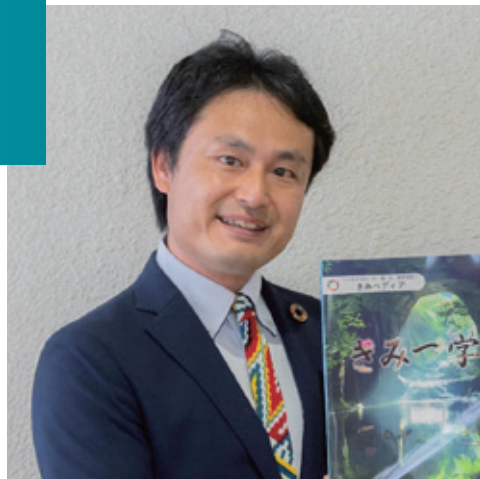
2008年 千葉県の公立小学校で教員を務める

2017～19年 現職教員特別参加制度を利用して小学校教育隊員としてマラウイで活動

2019年 千葉県の公立小学校に教員として復職

2021年 君津市教育センター主査（指導主事）として勤務

2026年 君津市立の小学校教員（教務主任）として勤務



“人の力を借りる”ことで多くの知見が結集 地域の自然をテーマにしたSDGs教育を推進

田仲永和さんは、千葉県の君津市教育センター勤務時に立ち上げた「きみつSDGs教育推進事業」で審査員特別賞を受賞した。同事業では国際理解と自然・環境教育の充実化を図り、マラウイで活動中の隊員や地域の人を講師に迎えての講演や授業を企画しているほか、探究学習のためのテキスト『きみベディア』を田仲さんが主導して編集した。

そうした幅広い活躍を可能とした田仲さんのモットーは、“人の力を借りる”というもの。

『『自分には知識がないからできない』ではなく、諦めずに人のつながりを見つけていくと、必要な知識や技術を持っている人につながることができるものです。そこから途切れそうな活動がつながったり、さらに広がったりします」

実際、君津市の教育事業は、多くの人の力を借りることで実現できたという。

「講演も授業も私はコーディネーターの役割で、メインで話してもらうのは、地域で自然や環境、歴史などに関わっている人たちです。そういう人を自分で発掘したり、つながりを頼ったりして会いに行き、授業と一緒に行いたいと提案しました。平日は通常業務があるため休日も使い、1日で10人と会うこともありました。まさにさまざまな人の力の結集でできた事業なのです」

こうした活動をテキストと写真でまとめたのが『きみベディア』。君津市内の海・山・川といった自然、歴史、産業、環境問題など、地域について幅広く知ることができる1冊だ。

人の力を借りるという考えには、協力隊員時代に行き着いたという。

「マラウイの教員養成校で体育と算数の指導法を教えていましたが、より楽しく学べるようにと、『掛け算ソング』『縄跳びソング』など20曲ほどの歌を作りました。しかし作曲のスキルは自分にはない。そんな時、『これいいね』と言ってくれた学生が、音楽にしてくれたのです。そして、それをマラウイの他の学校に広くPRする時も、動画を撮ってくれる人、出演してくれる教育科学技術省の人、といろいろな人の力を借りて効果を上げました」



必ず体験につなげることがきみつSDGs教育の特徴で、写真は君津市内の小学校の児童たちが、地域の方から植物や動物の話の聞いたり、「絞れ水（湧き水）」の水路にどんな生き物がいるのかなどを学習している様子。「水路にはホタルのエサとなるカワナという貝がいて、この里山にはホタルが飛び交います」(田仲さん)

人が協力してくれるのも、素晴らしいアイデアがあつてこそ。それを考えるコツも隊員時代に身に付けたという。

「粘り強く考え続けることです。どうやったら掛け算ソングを多くの人に届けられるか分からず、くじけそうになる時もありましたが、夢に見るほどひたすら考えました。すると1週間に1回くらい、アイデアが浮かんでくることを発見したのです。2週間考えれば2つ、1カ月なら4つ出てくる。きみつSDGs教育推進事業も考え続ければ、突破口が開けると思いながら取り組みました」

社会還元表彰には、田仲さんなりの思いがあり、自ら応募に踏み切った。

「今、教育を取り巻く環境は厳しく、教職に就く人が減っていると感じます。『教育の世界って良いよ、自分のアイデアで、こんな面白いことができるよ』ということを伝えたいのです。教員にはいろいろな縛りもありますが、協力隊経験者には、それを突破できる力が身に付いていると思います」

多文化共生賞

かわかみ きみえ
川上貴美恵さん

日系／ブラジル／日系日本語学校教師／2005年度0次隊・愛知県出身

〈略歴〉

2003年 大学卒業後、民間企業や小学校に勤務
2005～07年 日系日本語学校教師隊員としてブラジルに赴任
2008年 愛知県西尾市の社会福祉法人「せんねん村」に入職し、保育園で外国につながる園児の就学をサポート
2014年 同市から委託された多文化共生事業に参画し、「多文化ルーム KIBOU」の責任者となる。現在は5～18歳を対象に、就学・登校・学習の支援を行っている



“気になったことを突き詰める”ことに始まり、 “波を逃さず”“つながりを大切に”して外国につながる子どもを支援

ブラジルの日本語学校で活動した川上貴美恵さんは帰国後、地元の愛知県西尾市で「多文化ルーム KIBOU」の立ち上げに携わり、現在は責任者として“不就学ゼロ”を掲げて外国につながる子どもたちの学びや成長を支えている。川上さんが大切にしているモットーは3つ。1つ目は、「気になる」と思ったことは、最後までやってみること。2つ目は、よい波が来た時にすかさず乗ること。3つ目が、出会った人とのつながりを大切にすることだ。

1つ目の考え方の原点には協力隊参加以前のある出会いがあった。小学校の講師をしていた時、クラスに日系ブラジル人の子がいたのだ。学校に来てても楽しそうではなく、周囲の子どもたちとけんかをする也多い。勉強にも興味を示さなかった。「その子とコミュニケーションを取りたくて、ブラジルや日系移民について調べ始め、地域の国際交流協会にも足を運び、ポルトガル語も学んだんです。気になったことを1つずつ追いかけていくことが、協力隊への興味につながりました」

2005年から2年間、日本語学校教師隊員としてブラジルへ赴任し、6歳から60代まで幅広い年代の人たちに日本語を教えた。日本にいたときは日系ブラジル人の社会を外側から見ていたが、現地に入れば、その社会の「渦中」に身を置くことになる。「今までイメージすることしかできなかったところに入ると、多くの刺激を受けますし、アイデアもたくさん湧いてきます。結婚式や葬式、ホームパーティーなどのイベントにも足を運び、現地の習慣や風習を知ったことは、今の活動に生かされていますね」

任期終了後、川上さんが地元に戻った時は、ちょうど多国籍の人々の受容に向けた潮流が社会に広がり始めた時期。外国にルーツのある子どもの就学準備のための事業を市が始めようとしていたところに、協力隊から帰国した川上さんが加わったのだ。「最初から自分一人では何かをつくらうなんて思っていたわけではありません。たまたま時代の流れがあって、事業をやってみようという動きがあり、そこに私が協力隊から帰ってきて、担当させてもらうことになったんです」

まさに川上さんがいう「波に乗る」瞬間だった。現在も、チャ

ンスが訪れたらすぐ動けるように、補助金や基金などの情報にはアンテナを張り、「こういうことをやってみたい」というアイデアを日ごろから頭の中に留めるようにしているという。そして、協力隊時代から続く「人とのつながり」の存在も大きい。協力隊の存在を最初に教えてくれたのは、地域の国際交流協会の人たちだった。また帰国後も、現地との交流事業やコロナ禍の時期のオンライン活動などでは、人との縁が次のアイデアを生み出してきた。多文化ルーム KIBOUもまた、そういったつながりから、どんどん展開していった。

「今は関わる人の規模が大きく増えました。担当を始めた当時の年間利用者は50人余りでしたが、現在は年間登録者が約300人に上り、スタッフ数も増加しています。かつて支援を受けていたインドネシアルーツの子が成長し、スタッフとして活動に加わるケースも生まれています。最初は日本人中心で考えていたものが、だんだん当事者の人たちと一緒に取り組んでいく形になってきました。当事者でなければわからないこともたくさんありますから、取り組みの質的な変化も進んでいると思います」

支援する側とされる側を固定せず、当事者が活動をつくる側に回っていく。その変化もまた長年、川上さん自身が3つのモットーを大切にしてきたからこそ生まれたのだろう。



大人向けの「おとなのにほんごクラス」も開講しているほか、子どもが親の母語を学ぶ「母語・継承語クラス」など、多様なニーズに対応した取り組みを展開している

多文化共生賞

おち さや か
越智さや香さん

日系／ブラジル／日系日本語学校教師／2005年度0次隊・岐阜県出身

〈略歴〉

2000年 関西外国語大学短期大学部を卒業後、教育関係の仕事などに就く
2005～07年 日系日本語学校教師隊員としてブラジルに赴任
2007年 JICAの制度を利用して大学に編入し、教員免許と認定心理士の資格を取得。また、愛知県のプレスクールモデル事業の指導員として外国につながるを持つ就学前児童への指導を行う
2008年 知立市の早期適応教室の指導員となり、来日直後などで日本語が分からない子どもたちに日本語や学校生活について指導
2009年 1月に任意団体として学習支援教室みらいを立ち上げる
2014年 NPO法人みらいとして法人化、代表理事に就任



“「できないこと」より「何ができるか」を考える” 小さく始めた取り組みが、人とのつながりで大きな輪に

愛知県知立市で外国につながる子どもたちとその家族を支援するNPO法人みらいの代表理事を務める越智さや香さん。小中学生の学習を支援する「学習支援教室みらい」を中心に、保護者にやさしい日本語での育児情報や交流機会を提供する「多文化子育てサロン みらい Jr.」、仲間と安心して学び合える心の居場所「みらい にほんご Plus」などを運営している。

取り組みの原点が、2005年から日系日本語学校教師隊員としてブラジルの日系日本語学校で活動した経験だ。日系3世、4世の子どもたちに日本語を教える傍ら、自ら現地の小学校で特別に生徒として机を並べさせてもらって授業を受けた。子どもたちが現地の小学校でどのように授業を受けているのか肌で感じてみようと思ったからだ。その体験は後に、外国につながる子どもたちの戸惑いや不安に気づく大きな助けとなった。

帰国後は知立市で、来日したばかりなどの事情で日本語が分からない子どもに日本語を教える指導員となった。「協力隊時代にお世話になった人々に間接的にでも恩返しをしたい」との思いから始めた活動は、地域の子どもたちへの学習支援に広がっていく。最初は学校内にある放課後子ども教室の一角、わずか2畳のスペースを借りて6人を対象にスタート。必要な子どもたちに支援を届けたいと、地域の人たちの協力を得ながら活動場所を広げ、現在の活動へと発展していった。その歩みを支えてきたのが「できないことより何ができるか考える」というモットーだ。「何か目標を達成しようとしたら、まず『できない』ことより、『何ができるか』を考えます。実際、活動の継続を模索する中で『補助金はもらえない』『活動拠点になる場所を確保するなんて無理』と周りからは言われましたが、まず細々とでもいいので、できることからやってみる。小さな活動でも続けていれば、それが実績となり、協力者が少しずつ増え、輪が広がっていくのです」

また、誰かとつながることも大切にしてきたという越智さん。NPOの活動を通じて、学校だけでは出会えなかった地域の人や行政など、多くの人とつながった。それが子どもたちを支える力になっている。



多文化子育てサロンでは、アットホームな雰囲気づくりを大切にしながら、親子で楽しめる活動を取り入れて正しい情報の提供や育児相談を行っている

「うれしいのは、活動の中からもつながりが生まれていることです。例えば、外国にルーツのある子どもを持つお母さん同士が知っていることを教え合ったり、かつて支援を受けていた子どもが成長し、今度は会をサポートする側になったりも。一人でできることは小さくても、人との関わりを介して活動が広がってきたように思えます」

帰国当初から今の道筋が見えていたわけではない。JICAの制度を利用して大学に編入して教員免許を取得し、目の前の課題に一つ一つ向き合う中で、次の道が開けていったという。「協力隊で活動していた時には今の自分を全く想像していませんでした。取り組むべきことを地道に続けるうちに、次から次へと道が開けてきた。これからも、“目の前の子ども”を大切にしながら、自分にできることを考えていきたいと思っています」

最後に、現役隊員たちへのメッセージを尋ねると、返ってきたのは自身の経験から生まれた言葉だった。「自分が現地で課題に感じたことや、やりたいと思ったことを、現地の方とのつながりを大事にしながらトライしてほしいですね。そうすれば、現地の方にとっても実のある活動になると思いますし、私自身そうだったように、その後の自分自身の学びや成長にもつながるはずです」

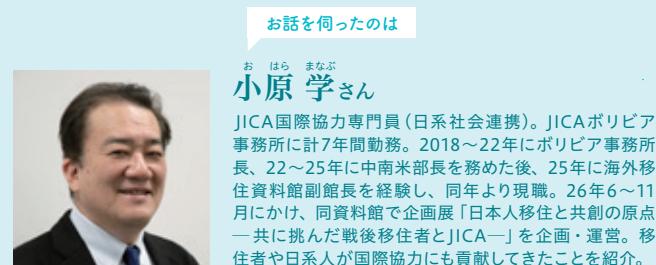
派遣国の横顔

Profile of the partner country of JOCV

〈日系社会〉

世界各国の発展に貢献してきた日系人 拡大する日系社会を通じた国際協力の時代へ

Text＝工藤美和 写真提供＝ご協力いただいた各位



“日系人”とは、海外に移住して根を下ろした移住者とその子孫を指します。日本とは異なる社会や風土の中で困難を乗り越えて新生活を確立し、地域社会の発展にも貢献してきました。特に中南米各国には約310万人が暮らし、現地の経済や社会開発の重要な担い手として尊敬と信頼を得ており、日本に対する良好なイメージにもつながっています。

戦後の海外移住は1952年に始まり、JICAはその前身時代からさまざまな移住政策の実施に関わりました。移住者数は1950年代後半をピークとして高度経済成長期に境に急減し増加は見込めない状況になりました。そのため、中南米の日系社会からの後継移住者のニーズに対し、85年に「海外開発青年事業」が発足。農業や医療、コンピュータ技術、日本語教育などの技能を持つ日本の青年が現地で活動する“体験移住”と位置付けられたもので、現在の日系社会青年海外協力隊などの前身の一つです。その後、事業目的は移住促進から日系社会支援へと移り、96年に日系社会青年ボランティアへと改編。2018年に現在の名称となりました。

各国の日系社会で世代交代が進む中、組織の持続性を確保することが課題となっています。例えば日本からの移住が始まって120年近くが経過したブラジルでは、次世代を担う若手日系人の参加を促すとともに、日本語・日本文化に純粋な興味を持つ非日系ブラジル人たちへも開かれた社会になることが求められています。

他方、パラグアイやドミニカ共和国といった戦後移住中心の国々では日本の伝統的価値観がより色濃く残り、赴任する



ボリビアの日系移住地・オキナワ市でのエイサーの演舞。近年は日系ルーツではないボリビア人がエイサーを習うことも増えているという
（関連：P24「公開！私の派遣国生活」）

隊員たちに対しては、日系の若い世代に日本的な精神性などを伝えることを期待される場面が多々あるでしょう。日系1世や2世のほうが隊員より日本の伝統に明るくてギャップを感じることもあるかもしれませんが、どの国の日系社会も隊員を温かく受け入れてくれますし、主な配属先となる日系団体からの要請内容は明確で、総じて活動しやすいはずです。

日系社会青年海外協力隊などの枠組みでの派遣は、日系社会を活性化していくことが主な役割となります。ただ、一口に日系社会といっても、世代交代や非日系人層の新たな参画も含め、その在り方は時代と共に変化し広がりを持っています。隊員の皆さんには日系社会だけに視野を狭めず、その国・地域全体の発展にどのように貢献できるかも意識しながら活動し、日系社会と受け入れ国、日本をつなぐ橋渡し役となることを期待しています。

変わりゆく日系社会の中で 試行錯誤を続けてきた日系隊員たち

任地の日本語学校の節目に立ち会い、 地域と共に“新しい学校”をつくった3年間

親泊まゆみさんは1998年にパラグアイ南東部のピラポ市へ赴任し、児童教育（教諭）の職種で日系社会青年ボランティアとして活動した。ピラポ移住地は60年に同国4番目の日系移住地として原生林を開拓して造られたのが始まりで、331家族1,793人が入植し、8万4,000haもの広大な土地は大豆の一大生産地として発展。90年にはピラポ市としてパラグアイの行政に組み込まれ、非日系人の転入も増えた。「移住地の皆さんは、天候が豊作・不作を左右する厳しい環境にある中で、ないものは工夫して作るたくましさがあり、味噌や豆腐から川魚のお刺し身までごちそうしてくれました。太鼓の保存会などで伝統文化を守る一方、テレレ（水出しのマテ茶）を回し飲んで和むパラグアイ文化も自然に取り入れていました」と親泊さんは当時を振り返る。

配属されたのは移住者の子どものための日本語学校で、通ってくるのは小学1年生から中学3年生までの児童・生徒たち。平日はパラグアイの一般校へ行き、土曜日に日本語学校で日本の習慣や文化を学ぶ。親泊さんには、移住者が継承してきた教育を踏襲しながらも、2世や3世である子どもたちに合わせた現代的な日本式教育を体育・図工・音楽の実技科目を通じて行うことが求められた。「日系の方たちは遠足や運動会などの学校行事を大切にし、入植祭、敬老の日や成人式なども盛大に行います。まずは移住地に溶け込むため、行事のお手伝いや婦人会の書道教室、さらには移住地内のラジオのDJまで、頼まれたことは何でも引き受けました」

当時、ピラポ市内には4つの日本語学校があったが、出稼ぎなどによる子どもと指導者の減少で廃校・統合が決まっており、その支援も活動の柱だった。1年目は4校のうちの1つ、富美村日本語学校で活動した親泊さんだったが、配慮したのは、アイデンティティと地域への思いに寄り添うこと。「廃校は大きな喪失感を伴う出来事です。だからこそ子どもたちが自分のルーツを誇れるような廃校式にしたいと思いました」と振り返る。また、日本への出稼ぎから戻った2世の若者から聞いた、「パラグアイではハボネス（日本人）と呼ばれ、日本に行けばパラグアイ人と呼ばれる。自分は一体何者なんだろう」との悩みも印象に残っていた。「私から見れば、2つの国の文化を知っていることは、移住

おやどまり
親泊まゆみ（旧姓 下川）さん
日系／パラグアイ／児童教育（教諭）／
1997年度0次隊・福岡県出身



PROFILE

琉球大学で社会科教育を学び、3年時のアジア旅行で貧困層の子どもたちと出会ったことで、「海外で困っている子どもたちの役に立ちたい」と日系社会青年ボランティア（現 日系社会青年海外協力隊・日系社会海外協力隊）に参加。任期の3年間活動し、帰国後は「物質的に豊かでも、心の豊かさを失って困っているのは日本の子どもたちではないか」との思いで女子少年院の法務教官に。24年にわたり務めていて、現在は沖縄女子学園に勤務中。

地で育ったからこそ得た素晴らしい持ち味です。『みんなすごいんだよ、あなたはあなたでいい。自分のルーツを誇りにしよう』と授業で繰り返し伝えました」

廃校式でもそうした思いを盛り込んだ歌を合唱。廃校後の建物を地域で活用する提案をし、生徒たちと壁画を描いてきれいに整えた。そして、1校に統合されたピラポ日本語学校での新しい学校づくりでは地域と共にある学校という点を大切にしようと校歌を作った。「町を流れるピラポ川など地域の風物が盛り込まれ、皆が親しめる歌詞と歌やすいメロディを移住地の方が作ってくれました。私が詩を補作し、同期隊員が編曲しました」

統合後は、日々の活動を通じて4地区の生徒・教員を一つにまとめた。特に印象に残るのは市の日系社会全体での運動会で、「パン食い競走や、婦人会の人たちが衣装や小物を手作りした仮装競走などを皆で楽しみました」と親泊さん。また、「“今の日本”が分かるものを取り入れたい」という教員の要望に応え、J-POPの曲や童謡に振り付けをし、生徒らに踊ってもらった。これが好評を博し、当時移住地で作られた『ピラポ音頭』の振り付けを頼まれることにもなった。現在もさまざまな行事で踊り継がれる音頭だ。

最後の1年は、パラグアイの森林減少の問題を知ったことを機に環境教育にも注力し、身近な廃材を再利用するリサイクル工作を紹介すると、創意工夫の精神に富んだ子どもた



ピラポ市の日系社会共同の大運動会。「パン食い競走のパンを朝から焼いてきてくれる人もいて、少し昔ながらの運動会に皆で楽しく取り組みました」

ちの心に響いた。「人形を作って劇をやろう」とアイデアを膨らませて実行する子もあり、子どもの日には、古いビニールと新聞紙で作った大きなこいのぼりを、移住地で保存されてきたこいのぼりと一緒に泳がせてお祝いもした。

「元々あるものと自分たちが作ったものを融合させて楽しむ姿に、彼らの心の豊かさやたくましさを感じました」

移住地での3年間で生きる力や生活を楽しむスキルを学んだ親泊さん。当時、日本で少年犯罪が凶悪化しているとのニュースに触れ、「今、救うべきなのは日本の子どもたちではないか」と考えるようになり、帰国以来、少年院の法務教官として働いている。



富美村日本語学校の廃校制作で描いた壁画「未来へ」と、当時の中学生たち

1世と2世の価値観をつなぎ 3世の未来を育てるコミュニティづくり

藤井寛之さんがドミニカ共和国の首都サントドミンゴの日系人協会に赴任したのは、同国への日本人の移住開始から60年たった2016年。協会は日本語学校の運営や入植記念式典、文化行事などを通じて国内の日系人の結束を図り、日本語・日本文化を次世代に伝えることなどを主目的としていた。ただ、協会の運営は70代後半を中心とする1世が主体で、将来を見据えた担い手育成が課題だった。行事のたびに遠くの移住地からも泊まりがけの参加者が来るほど結束のある日系社会だが、仕事などを理由に40～50代の2世の関わりが減りつつあり、藤井さんには協会業務の支援に加え、日系行事への2世の参画推進が期待された。

赴任当初、コミュニティ開発という職種名が理解されづらいと感じた藤井さんは、日本語学校の体育授業や高齢者向けの健康教室を担当して「先生」という立場をつくり、1世のほか、日本語学校に通う3世、その保護者の2世など各世代と自然に交流。すると、2世が日系社会から遠のいていたのは1世との価値観の違いに理由があると分かってきた。「こうすれば行事を早く実施でき、楽しくなるのでは」と改善案を出す2世に対し、移住者として日系社会を支えてきた経験から貢献度や実績を重視する1世は、これまでのやり方

ふじい ひろゆき 藤井寛之さん

日系／ドミニカ共和国／コミュニティ開発／
2016年度1次隊・山口県出身



PROFILE

小学校から大学までハンドボールに打ち込む。高校の体育教員になるも指導の行き詰まりを感じ、ハンドボールの本場・スペインで語学留学と選手活動を経験。帰国後、中学校教員として働く中で海外での教育・文化継承に関心を持ち、日系社会青年ボランティアに応募。帰国後はJICA中南米部に3年余り勤務した後、犬猫の高度医療を専門とする動物病院で経営企画などに携わる。

や移住当時から受け継がれてきた慣習を大切にしていた。「平行線だと感じました。それぞれの価値観の違いを否定せず、思いが重なる部分を探したい。まず1世の本音を知ろうと地方の移住地などに通うようになりました」

同国への日本人移住では1956年から3年で249家族1,319人が入植したが、政変や過酷な自然環境などから農業による定住は困難を極めた。開拓精神と日本人としての誇りを保ちながら、東洋野菜の普及などドミニカ共和国社会に貢献したものの、後には移住地での農業経営が難しくなり、都市部で農業以外の仕事に就く決断をする人も増えた。「1世が大切にしてきた歴史と誇り、思いを知り、それらを尊重しながら、2世にもより関わりやすい形を作る必要があると感じました。そのために1世と2世が共に愛情を注ぐ孫・子どもであり、日系社会の未来を担う3世の子たちを中心として協力をお願いできないかと考えました」

任期1年目の終盤、藤井さんは日本語学校で米作りと日本食の課外授業を企画。1世の農地で田植えや稲刈りをし、育てた米や梅干しを使ったおにぎり作りを通じて、移住の歴史を学ぶ内容だ。当時の協会副会長で篤農家の日高武昭さんに協力を仰ぐと、わざわざ馬を借りて水田の代掻きをし、苗も育てて日本式の田植えができるよう用意してくれた。授業には保護者である2世や、それまで行事の準備や運営に関わる機会の少なかった非日系人配偶者らも含めて約80人が集まった。3世に田植えを教える1世の姿を見て、2世も



日本語学校の活動で実施した田植え体験。「おじいちゃんたちは農業をしに日本から来た、農業はこういうふうにするんだよということを伝える機会になりました」



関係各所への調整が実り、実施にこぎ着けた七夕祭りの様子

自然に水田に入り手伝った。授業後、日高さんは藤井さんに「ずっと子どもたちに日本の農業を伝えたかったけれど、できなかった。そのことに気付いてくれてありがとう」と涙ながらに思いを吐露したという。

この日を境に、藤井さんは「日系社会のことを真剣に考えてくれる人」と認知され、他方で2世に対する1世の雰囲気も変わってきた。藤井さんは、今度は2世の本音を聞く場を設けようと、以前行っていたバレーボールを再開したいという2世男性と「おやじの会」を結成。活動許可を協会から取り、毎週練習で集まった。

1世・2世双方の要望を聞いて協会と調整することを重ねていき、任期2年目には首都で初の日系バレーボール大会を開催。全世代120人以上が参加して盛り上がり、日系社会に新しい風が吹き始めた。卓球部も立ち上げたほか、盆踊りの練習には非日系の配偶者も参加するようになり、新たに七夕祭りも始めるなど行事をアップデート。世代や性別などの垣根を越えて集まる催しが増えていった。

2世たちの活動を定着させてほしいという協会の要望から、藤井さんは任期を延長。2回目のバレーボール大会では広告費を集め、協会やJICAからの予算に頼らない自主運営を実施した。任期終了後にはバレーボールや卓球の活動から新チームが誕生し、中南米日系社会で2年ごとに開催されるスポーツ大会「Confraternidad Deportiva Internacional Nikkei」にも参加した。藤井さんの活動は、現地の日系社会が再びつながり、世代や地域を越えた新たな交流を広げる確かな足掛かりになった。

日系移住の歴史が息づく町で 非日系人も巻き込んで進めた観光開発

日本人のブラジル移住は1908年から始まり、農業・工業移住を通じて現在約270万人という世界最大の日系人コミュニティが形成されている。西岡里佳子さんはコミュニティ開発隊員として2024年からサンパウロ州南部のレジストロ市に赴任し、レジストロ日伯文化協会で地域のエコツアー開発とお茶の商品開発を行った。

同市とその周辺はブラジルで最初期の日系移住地として知

にしおか りかこ 西岡里佳子さん

日系／ブラジル／コミュニティ開発／
2024年度1次隊・千葉県出身



PROFILE

大学卒業後、お茶の小売りメーカーに就職。日本茶検定を取得し、販売促進イベントの企画などの経験を積む。海外での買い付け業務を希望していたがコロナ禍で機会を得られず、広告代理店に転職。海外で仕事をしたいと考えていた時に協力隊の要請書でお茶を生かした観光開発を行うという内容を見て、お茶の知識と経験を生かしたいと応募した。

られ、1913年から日本人が原生林を開拓して造り上げた町である。市内ハポーザ地区の山間には築100年以上の家屋が保存され、畳を作るためのイグサ加工場、日系人が建てたコミュニティ会館など日系移住の歴史や文化を感じられる場所も残る。また、同市を含むリベイラ川流域はブラジル政府から環境保護地域に指定されており、かつて同地で栄えた紅茶産業はコスト高や為替の問題から衰退したが、残った生産者がヤシやレモンの木とチャノキを混植して行うアグロフォレストリーで注目される。配属先は、ハポーザ地区の茶栽培や地域の自然に触れつつ移民史も学ぶことのできるエコツーリズムの企画を進めてきた。

日本でお茶に関わる仕事を経験した西岡さんは、そうした背景に興味を持ち、特産品を生かした観光開発をするという要請に応募して派遣されることとなった。着任すると「日本人が来たよ」と配属先に家族のように温かく迎えられ、先輩隊員が築いた人脈を基に、旅行会社や市観光協議会と連携し活動を始めた。

歴史が古い移住地の場合、戦前移住者の子孫が6世、7世になる一方、戦後に移住した1世も健在だ。さらに市内は非日系の住民も増え、ハポーザ地区にもある日系文化協会の会長や役員を非日系人が務めるようになるなど、関係者の世代やバックグラウンドは多種多様。日系人の団体から地域コミュニティ全体の団体へと変容しつつある。赴任後半年から1年は、地域の人々と信頼関係を築くための交流とフィールド調査に費やした西岡さん。特に観光開発には地域の協力が不可欠なので、カウンターパートで観光の熱心な推進役である80代の日系人とハポーザ地区に通った。「日系の方たちは個人によって温度差はあっても『頑張ってみよう』と賛成してくれるのですが、非日系の方たちの協力を得るまでには時間がかかりました」

例えば、ツアーの一環で日本文化体験として流しそうめんを提案したところ、普段は自然に日系の文化行事に参加している非日系の人たちだが、「本当にそんなことがやれるの？ 私たちはできない」と言いだした。「自分たちが全く知らない日本の行事をやろうと言われて困惑したようでした」。

それでも西岡さんは根気強く話し合いを重ね、パイロットツアー実施にこぎ着けた。ツアーに否定的な非日系の人た

中には「見守るだけでいいから」と同行してもらった。パイロットツアーには、ルーツである日本の文化を知りたいという日本語学校の生徒と保護者、民謡の会の人たち40人ほどを招いた。流しそうめんはもちろん、農村体験やハポーザ地区巡りも非常に楽しんで帰った。「その成功を見て、非日系の人たちも『できるんだ』と分かってくれ、その後はとても協力的になりました。最初の実績をつくるまでが大変でした」。

西岡さんは念願だったお茶の商品開発も進めた。数少ない日系のお茶農家と協力し、アグロフォレストリーの手法で栽培した茶葉を使い、日本の製法を参考にした釜炒り茶作りに挑戦した。釜炒り茶は、煎茶を作る蒸し製法に比べ技術習得が容易で味が安定しやすいことから導入した。「完成したお茶は、ほうじ茶を思わせる香ばしい風味が特徴です。日系人にはどこか懐かしく、非日系ブラジル人にも親しみやすい味わいです」

日本語学校や地域のイベントでは日本文化の一環として急須を使ったお茶の入れ方を紹介した。「日本式の入れ方を知らない人が多く、やかに茶葉を入れて沸かしていたので、



釜炒り茶を実際に作る様子。現在3軒ある日系の茶葉生産元に協力を仰いだ
ハポーザ地区に残る日系移民の旧家屋

伝統的なやり方のお茶を味わってもらいました」。非日系人には、暑い気候に合わせてアイ스티ーにし、地元産のレモンや蜂蜜も加えて提供すると好評だった。地域のイベントや日系社会の行事などで販売し、収益を地域活動に還元する仕組みも残した。西岡さんは派遣前までブラジルにこれほどの日系社会が息づいている実感がなく、行ってみて驚いた。任地での2年間を経て、今度は日本に暮らすブラジル人コミュニティを訪ね、新たな交流を始めたいと考えている。

活動の舞台裏 日本文化をつなぐ若い力—— 日系・非日系の枠を超えて広がるブラジルの“ジャパカルチャー”

ブラジルでは、南米最大級のアニメフェスティバル「Anime Friends」が毎年開催され20万人以上を集めるのをはじめ、J-POPやゲームなど日本のポップカルチャーが人気だ。近年は日系の若者たちがSNSなどで日本のポップカルチャーに触れ、それらを取り入れたイベントを企画・運営するなど日本文化の発信役として存在感を高めている。

こうした日本文化への関心は、日系人に限られたものではない。西岡里佳子さんが日系人の少ない北部の都市レシフェで日伯文化協会を訪ねると、非日系人の若者が日本語学校に通い、教師としても活動し、イベントを行っていた。「彼らは日本文化を純粋に“好きなカルチャー”として楽しんでいて、J-POPとK-POPを区別せず、タイなども含めたアジアの音楽やアニメをまとめて好きなんだという印象でした」

『鬼滅の刃』などのアニメ作品やJ-POPをきっかけに日本語を学び始める人も増えている。「ONE OK ROCKやAdoなど日本のアーティストがブラジルで公演した時は、日系ではない若者が多数来場していて、流ちょうな日本語を話すので驚きました」

他方、活動の中では日系社会の役職者と仕事をする機会の多かった西岡さんは、同世代とのつながりを見つけることに少

し苦労したという。「そこで文化協会の青年会に参加して、太鼓や三味線を教わりました。むしろ皆さんのほうが日本文化に詳しくて、逆に教えてもらいながら仲良くなりました」と振り返る。こうした若い世代の活動は、日系・非日系の枠を超えて日本文化を愛する多様な人々をつなぎ、ブラジル社会に新しい交流の場を生み出している。



ブラジルのサンパウロ州で活動した中村佑麻さん（日系/ブラジル/日本語教育/2022年度7次隊）は任地のアニメイベント会場で書道教室を行った

お悩み相談

アドバイスを聞きました！

今月のお悩み

ごみ分別などの環境保全意識について
市民の興味を引き出すことが難しいです

（アジア/環境教育）

地方自治体の役所に配属され、ごみ分別の普及を支援しています。役所から市民に向けた発信も行われているのですが、分別に対する意識や知識がなかなか根付かず、啓発のためのセミナーを開催しても、限られた人しか参加してくれません。結局、収集したごみを職員が分別することになり、他の取り組みに割く時間が取れません。どうしたらもっと市民にアピールできるでしょうか。



金子先生からのアドバイス

まずはメリットを提示して興味を持ってもらいましょう
大きな理想より、個人レベルの価値を意識することが大切です

途上国の人に限らず、日本人でもそうだと思いますが、自分の得になると思わないことには関心を持ちにくいですね。特に環境教育分野の方はマナーの側面からアプローチしがちですが、メリットを示さなければ耳を傾けてもらうのは難しいかもしれません。メリットとは、例えばリサイクル資源が売れるといったこともそうですが、よりささやかに、セミナー開催時に記念バッジや折り紙細工、日本の風景の絵葉書をプレゼントする。あるいは、子どもなら飴玉をあげるなどでも、気を引くことができるでしょう。

私が活動したマレーシアの社会では、イベント開催時には主催者が食事やお茶、菓子を用意することが一般的です。そのため、ただセミナーなどを実施しても、なかなか関心を持ってもらえないかもしれません。現地の団体もインセンティブになるものを準備して集客することを行っていますから、そういったやり方も参考にするとよいと思います。

また、同じくマレーシアの事例でいえば、自分の身内や持ち物を大切にするため、街路はごみだらけで汚いの、家の中は非常にきれいだったりします。「公共の場所は自らが保全する対象ではない」という価値観の人に対し、大上段から「街を美化しましょう」「地球環境を守りましょう」と言ってもピンとこず、「自分には関係ない」という反応になる。あるいは「先進国」日本の環境意識をそのまま求めても、「なるほど理想はそうだけれど、ここでは無理」という感想で終わってしまう。各国で事情は異なる

でしょうが、大なり小なりそうした傾向はあるはずです。

それを踏まえてどうアプローチすべきか。例えば本人や家族に関わる形で、「汚くしていると感染症や害虫が増える。家族が病気で死んじゃうかもしれないよ」などと個人レベルの話から入ると受け止めてもらいやすいでしょう。

そもそも日本人にしても、公衆衛生への意識の高まりはここ数十年の話で、私が子どもの頃は汽車の床や座席の下などごみだらけでした。それが変化したのは、教育によって「清潔でなければいけない」と反復して刷り込まれた結果ですから、派遣国の人々にも繰り返し伝えることで何かが変わる可能性がある。そのためにも、本来の目的から少し外れていてもメリットを示し、環境教育の場に関わり続けてもらうことが大切なのです。

今月の先生

かねこ まさみ
金子正美さん
マレーシア/村落開発普及員/1989年度1次隊、短期/マレーシア/林業・森林保全/2024年度9次隊・北海道出身
帯広畜産大学で環境保全学を学んだ後、北海道大学大学院で生態系管理学を専攻。1985年に北海道庁に入庁し、89年に同行で初めて現職参加制度の下で協力隊に参加。マレーシアでの活動を経て復職し、2001年より酪農学園大学に移り教壇に立つ。現在、同校名誉教授。また、23年に同校認定第1号のベンチャー企業として株式会社インターリージョンを設立し、代表取締役CEOを務める。



近年、教員の時間外労働の問題や生徒数減少などで存続が危ぶまれる“部活動”。三重県桑名市で一般社団法人Tamari Hubを立ち上げた糸見涼介さんは、部活動を学校から地域へ展開させ、生徒の実践的な学びの機会も提供する「くわなモデル」を推進している。中学校の恩師からの相談で昨年から活動を始めた糸見さんだが、その原点はバヌアツでの協力隊経験だ。

高校時代、駅伝に打ち込んでいた糸見さんは駅で目にした協力隊の募集ポスターに惹かれる。陸上競技という職種があると知り、「海外に行き、東京2020五輪・パラリンピックに選手を率いて出場する」との夢を持つ。大学でも陸上を続けつつ、語学の勉強や教員免許の取得などにも力を入れ、新卒で協力隊に参加。バヌアツへと派遣された。

赴任と同時に陸上競技協会の中長距離代表チームのコーチ・監督に任命された糸見さん。直面したのは“数字の概念の違い”で、時間や距離を数字で捉えることが根付いておらず、ペース配分なども理解できない状況に驚いた。言葉ではなく、選手と一緒に走って「1kmを3分半で走る時はこのくらいの速さ」などと感覚を体で覚えてもらい、日本での当たり前が通用しない世界で少しずつ変化を生み出していった。

赴任3カ月後には指導していた女子選手が大洋州諸国の総合競技大会「パシフィックゲームズ」のハーフマラソンで優勝。奥地の村落出身で靴をはく習慣すらなかったが、教育熱心な両親が町の学校へ通わせたことで能力が見いだされ、

大会出場時に糸見さんらの目に留まった選手だった。「教育の大切さはもちろん、教育機関という場でいろいろな人に接して機会を得ることの意義を改めて感じる経験でした」。

だが、赴任から約1年後の2020年3月、コロナ禍で帰国が決まる。21年の東京五輪・パラリンピックへの代表チーム出場も実現せず、糸見さんは非常に落ち込んだ。ただ、現地経験からスポーツと開発に関心を持ち、イギリスの大学院で開発学の修士号を取得するなど自己研鑽を継続。一斉帰国から3年を経た23年4月、1年間の短期隊員として再びバヌアツへ赴任し、体制が崩れていた協会を立て直すべく、中長期計画の策定から大会の運営改善、選手選考方法の見直しなどマネジメントを一手に引き受けて改革を図った。

同時に、魅力あるスポーツイベントを通じた地域活性化を目指して計画したのがトレイルランニング大会。“世界で最も火口に近づく火山”と評判のヤスール山での大会は任期満了後の25年2月にテスト開催にこぎ着け、10月には国際大会化した。IOC（国際オリンピック委員会）やスポーツ・フォー・トゥモロー（※）の支援策の下で糸見さんが主導したが、大会の“魅力”で人や資金が呼び込まれ、今年開催の回はバヌアツ政府中心で自立するに至っている。

隊員経験は今、Tamari Hubの活動で生かされている。部活動の地域展開として、学校や学年を超えて市内の中学生6人が週1回集まり、「メディア部・イベント運営部」として地域の中学生の奮闘を取材して冊子で発信。冊子を通じて

一般市民に地元中学生の活動を伝え、将来的な地域連携の足掛かりとする狙いだ。今秋には、商業施設でのイベントや地域活動に関わるプログラムも予定している。参加生徒たちが、従来の部活動のような教員・コーチといった“指導者”だけでなく、地域のさまざまな大人と関わって実践的なアクティブラーニングをできる環境づくりを目指す。

「私のバヌアツでの活動は大きく『代表チームの運営』と『トレイルランニング大会の創設』の2つでしたが、人々が率先して関わり、世の中への広がり大きく見せたのは後者でした。それは、さまざまな関係者がイベントの一員としてそれぞれ“主役”になれるから。部活動の地域展開に持続性を持たせる試みとして、この学びを応用しています」

参加生徒からは「既存の部活動には興味を持てず、『メディア部・イベント運営部』は学校の外と関われそうで面白そうだと思って参加しました」との声もあり、4月の活動開始から少しずつ慣れ、主体的に取り組む姿勢が育ってきたという。「これまでいろいろなイベントを主導し、一番成長させてもらったのは僕自身です。同様に、メディアやイベントの運営を通じて最も力を付けられるのは生徒たち本人でしょう。それは必ず、彼らの人生に資するはずです」

将来的には、このモデルを他の自治体にも広げる展望を持つ糸見さん。単なる部活動の肩代わりに留まらず、生徒が主体的に学んで成長できる新しい部活動のあり方への挑戦は、まだ始まったばかりだ。

糸見さんの歩み

2012年 高校駅伝の強豪・伊賀白鳳高等学校に入学



高校、大学と駅伝に打ち込みましたが、協力隊という目標ができてからは英語や教育の勉強にも力を入れました

2019年 協力隊員としてバヌアツへ



国立競技場に時計さえなく、選手も時間通りに動く感覚がないことに驚きました。国際大会出場に必要な時間感覚を育むところから始め、後にはろう者の選手の可能性も追求。指導選手がパラリンピック代表に選ばれました

2020年 コロナ禍により一斉帰国

2022年 サセックス大学開発学研究所で修士号取得



当時、イギリスで開かれたイギリス連邦の陸上大会でバヌアツの選手と再会できました

2023年 短期隊員としてバヌアツへ再派遣



JICAバヌアツ事務所の方から、再派遣について連絡を受けました。修士課程修了後、選択肢がいくつかある中で一番やりたいと思えたのは、バヌアツに再び行くことでした

2023年 IOCヤングリーダーズに選出



スポーツを通じた社会・生活の変化を目指す若者をIOCが支援するプログラムで、2023-26期メンバーは25人。同期らと毎月1回、オンラインで話す時間はとても刺激的です

2025年 バヌアツでトレイルランニングイベントを開催



箱根駅伝のように誰もが率先して参加したくなるスポーツイベントを企画すれば、自然と人が集まり自立的に回っていくと考えました

2026年 一般社団法人Tamari Hubを設立



25年に個人で取り組み始めましたが、市からの業務委託を受ける関係上、法人化しました。僕自身は現在、JOCV枠UNV制度でUNDP（国連開発計画）のエチオピア事務所に駐在中ですが、弟が日本での活動を担って頑張ってくれています

派遣から始まる未来 先輩隊員たちの社会還元



一般社団法人Tamari Hubを
設立・運営

いと みりょうすけ
糸見涼介さん

バヌアツ/陸上競技/2018年度4次隊、
短期/2023年度9次隊・三重県出身

Text=新海美保 写真提供=糸見涼介さん



1 隊員時代、パシフィックゲームズの開会式にて。指導した女子選手には、最初は靴で走ることに慣れてもらうところから始めた。「僕ははだしよりスパイクの方が良いと思い込んでいましたが、大会当日は本人を信じて、靴の着用やペース配分は任せました」2 2025年2月、トレイルランニングのテスト大会にてスタート前の選手たち 3 Tamari Hubの活動として、地元商業施設のイベントで市長に取材する中学生たち

※スポーツ・フォー・トゥモロー…スポーツを通じた国際交流や国際協力を通じ、世界の人々にスポーツの価値やオリンピック・パラリンピックに係る活動を広げることを目指す、官民連携による取り組み。東京2020オリンピック・パラリンピックを契機に始まった。

JICA 海外協力隊ウェブサイト
「帰国した方へ」もご覧ください

<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/>



INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

REPORT

JICA BLUE CARAVAN @TOKYO 「AFRICA BUSINESS BOOSTER」開催

JICA海外協力隊起業支援プロジェクト(BLUE)の一環として7月9日(木)にTokyo Innovation Base (TiB) でアフリカビジネスをテーマとしたイベントを開催し、スタートアップ支援機関や企業、学生など80人超に参加いただきました。「JICA BLUE CARAVAN」は、帰国隊員の経験や知見を社会課題の解決や事業創出につなげる全国展開型イベントです。当日は企業関係者や協力隊経験者らが登壇し、アフリカビジネスニーズ調査事業の成果を報告。現地人材との共創と協力隊経験者が持つ現場知の価値が共有されました。



アフリカ市場への参入や事業展開の可能性について白熱した議論が展開された

JICA BLUE
ウェブサイト
はこちら



(後日、イベント
レポートを公開
予定)

EVENT

「グローバルフェスタJAPAN 2026」

2026年10月17日(土)、18日(日)の2日間、新宿住友ビル三角広場にて「グローバルフェスタJAPAN 2026」が開催されます。会場内には、世界各地で活動した協力隊OVの帰国後の様子を知ることができたり、世界各地の任国を知ることができたりするブースやステージ企画などが盛りだくさんです。帰国後のキャリアに悩んでいる方や久しぶりに協力隊バイブスを感じたいOVの皆様と一緒に楽しみましょう！

また、JICA青年海外協力隊事務局では、JICA海外協力隊について知っていただける企画や個別相談ブースを設けます。周囲に協力隊への参加を検討している方がいらっしゃいましたら、ぜひお誘いあわせの上、ご来場ください。



SUPPORT

至善館「国際協力人材奨学金」のご案内

大学院大学至善館(東京都中央区)で、協力隊経験者など海外での国際協力の現場経験を1年以上有する方を対象に、授業料を半額～全額減免する「国際協力人材奨学金」の募集が始まりました。至善館はMBA in Design and Leadership for Societal Innovationという修士号を提供するMBAスクールで、ビジネスと社会イノベーション

の融合を目指しています。平日夜間と週末の開講で、働きながら日英どちらの言語でも修了できます。20以上の国・地域の企業人、NPO職員、起業家、難民背景を持つ方などが各40人の少数人数で学びます。リベラルアーツを土台に、現場の実感とビジネスの力を結び、社会を変える事業構想まで考え抜く2年間になります。2027年8月入学生を募集中。隊員経験を次のキャリアに生かしたい方はぜひご検討ください。

大学院大学至善館
ウェブサイトは
こちら



編集後記

今号はP2「JICA Volunteers' Reports」とP12-16「派遣国の横顔」で、同じパラグアイの日系移住地・ピラゴ市で活動した新旧のOVにご登場いただきました。約30年を経た2人とも、日本・パラグアイのどちらにも帰属しきれない日系2世や3世のアイデンティティ問題を感じたそうで、大変根の深い課題なのだと感じました。(飯淵一樹)

P5-11「特集」で社会還元表彰受賞者を紹介しました。華々しい受賞の裏にある努力、例えば田仲さんは、2年間、休日も休まずに、地域の人とつながる活動や冊子編集の作業に集中してきたそうです。どうやって事業を実現させたのか、表に出ないエピソードが伺えた意味は大きいと思いました。(阿部純一)

クロスロード

【2026年10月号】 第62巻第8号 通巻719号
発行日: 2026(令和8)年10月1日

隊員の皆さんから「みんなに紹介したい活動アイデア」「現地での出来事」などの情報や経験談も随時募集中です！

今号の『クロスロード』はいかがでしたか？
ぜひご意見やご感想をお寄せください。
『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



『クロスロード』は、
JICA海外協力隊の
ウェブサイトでも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員(OV含む)の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

あの日、
地球の、
あの場所
で。

任地の思い出を聞きました。

スリランカで魚好きが高じて付いた 不思議なあだ名

さとうとしはる
佐藤利春さん

SV短期/スリランカ/食品加工/2008年度9次隊、SV/スリランカ/食品加工・流通/2009年度3次隊・長野県出身

「おーい、ポトゥバリヤー!」と、任地の漁師たちからよく呼び掛けられていた隊員時代の私。ポトゥバリヤーとは彼らが私に付けたあだ名で、その意味はシンハラ語で魚の“カワハギ”のこと(!)です。

私が通算2年半にわたって活動したのは、スリランカ南部に位置するウェリガマ市。今でこそリゾート開発が進んでいますが、初めて訪れた2008年当時はまだ貧しい海辺の町といった風情でした。海岸には漁師が水揚げしたての魚を売る簡易マーケットがあり、多様な魚が並んでいました。

現地の人々はどんな魚でもカレーにして食べるそうですが、私の目的は刺し身にすること。小形のマグロやカツオ、ハタ、そしてカワハギなどのうち、鮮度の良いものを見極めて買っていました。それを自前の

刺し身包丁でさばいていたのですが、刺し身目当てに若い隊員たちから近所の猫までわが家に集まるようになったのは、楽しい思い出でもありますね。

そして、さまざまな魚の中でも私が特に気に入っていたのがまさにカワハギで、いつも「ポトゥバリヤーある?」と聞いて回っていると、やがて顔なじみの漁師たちから“ポトゥバリヤー”と呼ばれるように。彼らにとっても印象的だったのか、昨年久々に現地へ行ったところ、まだ覚えていて「ポトゥバリヤー!」と声を掛けてくれました。

時には、なぜ自分がカワハギなのか!?ととうとうしく感じることもありましたが、捕れたカワハギを取り置きしてくれたり電話で知らせってくれたり、仲良くなった漁師たちとの交流を今でも懐かしく思います。



Illustration=牧野良幸 Text=飯淵一樹(本誌)



OB・OG ショップ ファイル

No.04

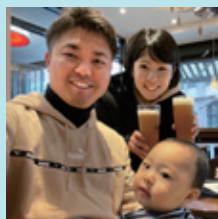
ZUMOT JAPAN

ヨルダンのZUMOTワイナリーから、Wine Maker's Selection、Reserve、Terroir Expressionの3つのシリーズを輸入。販売はオンラインショップのみ。

ZUMOT JAPAN
販売サイト



お話しいただいたのは



えんどうあきひろ
遠藤晃敬さん

ヨルダン/体育/

2014年度3次隊・愛知県出身

大学卒業後、体育隊員としてヨルダンのパレスチナ難民キャンプに赴任。小学1年生から中学2年生までの男子校で授業環境の改善に取り組む。帰国後、酒類業界での実務経験を経て、2023年にZUMOTワイナリーの正規代理店として「Saint George」の輸入販売を開始。



糖度の高いブドウを生み出すヨルダンの砂漠とSaint George。遠藤さんお勧めの楽しみ方は「開栓から2日目、3日目に一番香りが立つので、その変化を味わうこと」

協力隊時代に出会ったヨルダンワインの味に衝撃 ワイン販売を通じてヨルダンのファンを増やしたい

ヨルダンワインは“最後の晩餐”^{ばんさん}のワインとして語り継がれた歴史を持つ。一度は途絶えたそのワインを現代によみがえらせたのが、中東ヨルダンのZUMOTワイナリーだ。遠藤晃敬さんが立ち上げた「ZUMOT JAPAN」は、そこで造られたワイン「Saint George」^{セイント ジョージ}を扱う日本で唯一の正規代理店。イスラム教徒が9割以上を占めるヨルダンだが、観光業が主要産業の1つということもあり、実はワイナリーやブルワリーも存在する。遠藤さんも協力隊活動の合間に酒を楽しんでいたが、その中で強烈な印象を残したのがSaint Georgeだった。

ZUMOTワイナリーのワイン造りは、徹底したオーガニック主義。化学肥料などは使わず、自然環境に応じた抵抗力の強いブドウを育てている。ブドウ畑は昼と夜の寒暖差が大きく、夏は強烈な日差しを浴びる過酷な砂漠環境にある。魚を放した溜め池から栄養を含んだ水だけを最小限与えながら育てた糖度の高いブドウから造られたワインはどっしりと濃厚で香り豊か。

希少なヨルダンワインゆえワイン好きの関心も高いが、小さなワイナリーなので輸入量を増やすことは難しい。最近では中東情勢の悪化もあり、在庫調整に頭を悩ませることも多いという。それでも「今は事業を止めないことに注力しています。継続することで、ヨルダンワインとヨルダンのファンを増やしていきたい」と先を見据えている。



ブドウ園はヨルダン北東部の州都マフラックにある。その土壌はミネラル分を豊富に含んだ粘土や石灰岩などから成り、ブドウの味に特徴を与える



製造責任者のエバさんに遠藤さんがワイナリーを案内してもらった時の1枚。樽にはフランスのシャサン社製の熟成樽を使用しており、「樽の香りが良い」という評価も多い

Text＝油科真弓 写真提供＝遠藤晃敬さん

任地の食生活に彩りさ！

隊員 めし

今月の料理

ルーマニア隊員から教わりました！

キャベツの酸味とハーブの香りが癖になる
ロールキャベツに似て非なる料理

サルマーレ



住んでいた寮の管理人の女性から教わってキャベツの漬物作りをする菅さん。「樽にキャベツ10個くらい入れて発酵させます。冬期にぐんと冷え込むルーマニアの気候を生かした伝統食品です」



教える人



すが ともみ
菅 友美

(旧姓 金子)さん

ルーマニア/保育士/
2000年度3次隊・東京都出身

東京都立の保育学院を卒業し、0～2歳児を養育する乳児院で4年ほど勤務してから協力隊に参加。ルーマニア南部にあるスラティナの保育園で活動した。帰国後に同期隊員だった菅 達雄さん（ルーマニア/システムエンジニア/2000年度3次隊）と結婚。その後、大学で看護師と保健師の免許を取得し、神奈川県茅ヶ崎市で保健師として働いて12年になる。

ルーマニアで教育や保育の質向上を目指して活動した菅さん。2000年代の同国は激しい政変が社会に影響していた。「政府が代わって突然インフラが止まり、真冬に暖房がない状況なども体験しました」



材料（2人分・6個）

キャベツ 1玉
合いびき肉 200g
玉ネギ 1/2個
米 30g
ハーブ（ディル、タイム、オレガノなど） 2～3本から
レモン 2個
ベーコン 100g
ローリエ 2～3枚
トマトジュース 400ml（もしくはトマト1個と水100ml）
塩 適量
こしょう 適量
水 適量

レシピ

- ① 玉ネギはみじん切り、ハーブは粗めのみじん切り、ベーコンは幅1cmに切る。
- ② 大きい鍋にキャベツを丸ごと入れて、漬かる程度の水を入れる。そこにレモン1個を搾り入れ、塩小さじ2を加える。火をつけて沸騰したら弱火にし、4分たったら裏返して4分、計8分ゆでたら取り出して冷ます。
- ③ キャベツが冷めたら、葉を1枚ずつ丁寧に洗って、8～10枚（鍋の底に敷く分も含めて）用意する。厚い芯の部分は包丁で薄くそいでおく。
- ④ 合いびき肉、玉ネギ、米に加え、ハーブの2/3量をボウルに入れて混ぜ、6等分にしておく（混ぜ過ぎて強い粘りが出るとうれ上がりやがりが硬くなるため注意）。
- ⑤ キャベツの葉を芯を手前にして広げ、中央よりやや下に④をのせる。手前から奥へひと巻きし、葉の左側を内側に折り込む。残りを巻いて、最後に葉の右側を指で内側に押し込み留める。同じものを6個作る。
- ⑥ 鍋底の焦げ付き防止のため、余ったキャベツの葉を2～3枚敷き、ベーコンを散らす。その上に巻き終わりを下にして⑤を並べる。トマトジュースまたはトマトの角切りと水を注ぎレモン1個を搾り入れ、塩小さじ2、残りのハーブ、ローリエを入れる。
- ⑦ ふたをして火にかけ、沸騰したら弱火にして40分ほど煮込む。最後に塩、こしょうで味を調えて完成。

＼料理について／

ルーマニアでは秋にキャベツが大量に出回り、それを丸ごと樽の中で発酵させた酸っぱいキャベツの漬物で巻くのが現地のサルマーレですが、私は日本ではレモンと塩で酸っぱさを再現しています。それでも酸味とハーブの爽やかな風味が広がり、ちょっと癖になるようなおいしさです。サルマーレは結婚式やクリスマスなど、人が集まるときに用意される定番料理。各家庭でその家の味があり、当時ホームステイしていた仲間の隊員全員が、「自分のホストマザーが作るサルマーレが一番おいしい」と口をそろえて言っていたことも楽しく思い出されます。

レシピ・写真提供＝菅 友美さん Text・再現料理・Photo(再現料理)＝阿部純一（本誌）



公開！

私の派遣国生活

[ボリビア]

写真提供＝阿波根奈緒さん Text＝飯渕一樹(本誌)

あはごんお
阿波根奈緒さん小学校教育/
2025年度1次隊・沖縄県出身

暮らしている市、町、村



任地は戦後に沖縄系移民が開拓したオキナワ市という町で、入植が始まった順に第1～第3移住地に分かれています。私がいる第2移住地は人口の密集した第1移住地から約20km離れた集落で、中心部に日系家庭20世帯ほどが暮らし、周辺に非日系人の家や農地、牧場が広がるのどかな地域です。沖縄の文化やアイデンティティを本当に大切にしている、特にお年寄りは“うちなーぐち”を話す方も多く、現在の沖縄県内よりも方言を聞く機会が多くて驚きますね。スポーツが集まってお喋りすることが大好きな皆さんから、いつもイベントに呼んでもらって楽しく忙しく過ごしています。



上：閑静な第2移住地には小さな商店が3軒あるのみ。第1移住地へ買い出しに行く際は、公共交通機関がないので、知り合いに車で送ってもらったりするという

下：町の入り口に過去の隊員が設置した看板

左：地域のソフトボール大会。バレーボール大会や3移住地合同の大運動会といった行事もしばしば催され、子どもから高齢者までスポーツをする機会が多い

活動の様子

ヌエバ・エスペランサ校という第2・第3移住地の幼稚園児から高校生までが通う学校が活動先で、午前がボリビア式のカリキュラムの授業、午後が希望者向けの日本語・沖縄文化教室になっています。

私は日本語指導のほか、楽器やエイサーを教えたり、お楽しみ会などの特別活動を行ったりしています。午後の部に来る子の半数は非日系で、踊り好きなボリビア文化ゆえか、勇壮なエイサーに憧れて学びに来るケースも多いようです。今、地域社会と学校の連携が薄らいでいるように感じていて、お年寄りと児童・生徒が関わる活動を増やしていきたいと思っています。



上：三線の指導をする阿波根さん。現在は日本の小学5年生から高校2年生に相当する学年を複式学級で教えている

左：日本の心を伝える取り組みの一環として、生徒による教室の掃除も行う

住まい



上：昔の雑誌や沖縄料理の本、移住史の本など、家に残る蔵書は多岐にわたる

左：家の中で唯一クーラーの効く寝室。暑い日が多いので、この部屋で過ごすことが多いという

オキナワ市には沖縄県からの教員派遣制度が長らくあったので、当時の教員用の一軒家を使わせてもらっています。歴代の先生方が残した参考書や語学本が蔵書となっていて、歴史を感じるとともに、皆さん勉強を重ねながら活動していたのだなと感銘を受けます。第2移住地にはごみ収集がないため、各家庭で燃やするなどして処理しています。私はコンポストを作ったもっていて、日本とは異なる生活環境にも少しずつ慣れてきました。

食べ物

第2移住地にはレストランがなく、基本的には自炊です。商店の品ぞろえも限られていますが、ご近所から野菜のお裾分けを頂くなど、支えられながら生活しています。よく食事に誘ってもらい、南米らしくシュラスコを楽しんだり、沖縄料理をごちそうになったりもします。沖縄伝統のヤギ料理も、オキナワ市で生まれて初めて食べる機会がありました。



上：阿波根さんの自炊料理。第2移住地では週1回、1丁20ボリバーノス(約250円)ほどで豆腐が販売される

左：ボリビアやペルーでアンティークチョと呼ばれる串焼き肉。オキナワ市では衣が付いているのが特徴で、地域イベントの会場では青年会などが作りたてを振る舞ってくれるという

JICA海外協力隊
応援基金皆様からの応援
お待ちしております青年海外協力隊事務局
公式InstagramJICA海外協力隊のリアル
お見せします

JICA_KYORYOKUTAI

JICA海外協力隊
公式LINEアカウントシゴト診断、教えて！FAQ
などぜひ活用下さい